HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『うつほ物語』の君子 ： 「君子左琴」の思想および仲忠と正頼の政治性をめぐって
Author(s)	戸田, 瞳
Citation	国語国文研究, 148, 1-14
Issue Date	2016-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89222
Type	journal article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_148_01-14.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『うつほ物語』の君子
――「君子左琴」の思想および仲忠と正頼の政治性をめぐって――

戸田瞳

第一節　はじめに

妻曰。夫子織レ履以爲レ食。非二與レ物無一レ治也。左レ琴右レ書。樂亦在二其中一矣。……頌曰。於陵處レ楚。王使レ聘レ焉。入與レ妻謀。懼二世亂煩一。進往遇レ害。不レ若二身安一。左レ琴右レ書。爲レ人濯レ園。

（『古列女傳』巻二・賢明傳・八二～八三頁）(1)

君無レ故、玉不レ去レ身。大夫無レ故、不レ撤レ縣。士無レ故、不レ撤二琴瑟一。

（『礼記』曲礼下・一一一頁）

昔者舜作二五弦之琴一、以歌二南風一。夔始制レ樂、以賞二諸侯一。……故天子之爲レ樂也、以賞二諸侯之有レ德者一也。德盛而教尊、五穀時孰、然後賞レ之以レ樂。故其治レ民勞者、其舞行綴遠、其治レ民逸者、其舞行綴短。

（『礼記』楽記・四二七～四二八頁）

中国には古来、右に見られるような、君子たるもの傍らには常に琴を携えているべきであるという、「君子左琴」または「右書左琴」の思想が根付いていた。目加田さくを氏は、

君子左琴、右書左琴は知識人官僚の間に、更に広く君子たる教養人の間に通念となっていたのである。従って、士君子たるものが、志を遂げて官途に就くを得た場合には、琴は天下の政治に役立つが、又不幸にして意を得ず、逆境に沈淪した場合、又為政者と容れず、山水に隠遁し悠々自適の境涯にある場合にも、その志情を寓してその身の孤高を支持し、清節を保持せしめるのが琴であるという思想は、桓子新論、達則兼善天下無不通暢、窮則独善其身而不失其操、以来諸書に引用を重ねる毎に確乎たる金言となった。(2)

と、「時をえた為政者」のみならず「時をえず隠居の君子」となった者にも、「君子左琴」の思想が適用されるという、この思想の二面性を指摘している。氏はその上で、『うつほ物語』の「君子左琴」の思想をめぐり、三条京極に隠居して琴に明け暮れた俊蔭の造型を、「伶人ならぬ、琴に堪能なる有能の君子隠遯の姿、所謂「君子左琴」の

私的な面、伶人として召される事を拒否し、操を持し孤高をほこった中国の士君子の姿勢が、そのまま移入定着したものである」とした。

さて、『うつほ物語』において、「時をえず隠居の君子」となった者の琴が俊蔭によって体現されているとするならば、肝心のもう一方、「時をえた為政者」の琴は、いかなる人物によって体現されているのか。柳澤先氏は目加田氏の論を踏まえて、仲忠がその人物であると指摘している[3]。氏は仲忠と政治、そして琴との繋がりについて、たとえば父兼雅に強いられた弾琴（俊蔭巻・五六頁）や、女一の宮を禄として与えられた神泉苑での弾琴（吹上・下巻・二八九頁）などを指して、「秘琴披露によって政治世界に入り、秘琴披露を政治的な権力の獲得の手段として用いている」とする。

ただ、それらの場面における仲忠を、ただちに「時をえた為政者」と位置付けることは、果たして適当であろうか。本稿ではこの点の再検討も含め、作中において為政者と呼び得る可能性を持つ者、すなわち、仲忠、正頼、皇室の人間を俎上に乗せた考察を行いたい。その上で、彼らが琴をめぐってどのような関係を築き、また、特に仲忠と正頼が、政治世界においてそれぞれどのような道を歩んでいくのか、その描かれ方について探っていきたいと思う。

第二節　為政者仲忠と「君子左琴」

おとど、「梨壺は、さても知らず。ただ今、世は、右大将親子の御世になりなむとすめり。世の人は、伯父おとど、わが身より始めて、皆靡き果てにたり。それは、かの君の押し立ち悪しきにもあらず、自然に、恥づかしきによりて、人の、心を遣へば、靡くやうなるなり。宮は内裏に従ひ奉り給ひ、内裏は右大将に適ひ給へば、かのぬしたちもちて、『これを』と申さば、何の疑ひかあらむ。我も、口開くべくもあらず。中宮はおはします。故郷は、皆足末なり。例は、さる筋にもあらず」。

（国譲・上巻・六五二頁）

物語の後半、帝や春宮からの絶大な信頼を得るようになった仲忠は、たしかに政治の中枢に近づきつつある人物として語られる。しかしながら、先に述べた柳氏の論を検討する際に失念してならないのは、彼が為政者の側面を強めていくのが、あくまでも蔵開・上巻以降のことだという点である。

たとえばあて宮の入内後、正頼夫妻は、さま宮の結婚相手として仲忠に白羽の矢を立てているが、それはあくまでも、彼が俊蔭一族の秘琴の継承者であることに起因していた。

宮、「さまこそ、劣らず生ひ出でためれば、それをこそものすべかめれ。藤中将にこそ、『娘一人取らせて、子出で来ば、琴継いでもせさせむ』と思ひつれ。……」。おとど、「上も、と思ほして、御心とどめて、物のたまふにこそあめれ。……」

（沖つ白波巻・四四六頁）

これまで、そのような目論見が夫婦間で語られたことはなかったにもかかわらず、仲忠は琴の名手であるがゆえに、正頼家の婿候補として挙げられる。正頼夫婦がいかに仲忠の琴、ひいては俊蔭一族の秘琴を引き込みたがっているかが、やや唐突なまでのこの会話か

ら窺い知られよう。つまりこの時点での仲忠は、秘琴の継承者であるという点にこそ、存在意義を認められる人物だったと言える。結局、この目論見が実を結ぶことはなく、仲忠のもとには朱雀帝の女一の宮が降嫁することになるが、先の正頼の言葉によれば、帝のねらいもまた、俊陰一族の秘琴にあるらしい。実際、帝自身も後に、

「……思ひのやうに教へられたらむ喜びも、今は、かくなりたりとも、さりとも、ここにこそはせめ。いとうれしく、一の宮の御もとに、この手のとまるこそ本意叶ふ心地すれ。……」

（楼の上・上巻・八五七頁）

「うつくしきことかな。尚侍のとどめらるる手なめるを、皆弾き移したらむは、いと思ふやうなるべきかな。さても、いつばかり習ひ給ひてむ」。

（楼の上・下巻・八九〇頁）

と語っており、正頼の読みが外れていなかったことが明らかになっている。正頼と朱雀帝が、為政者ではなく秘琴の継承者としての仲忠に娘を嫁がせたがっていたことは、明白と言わねばなるまい。したがって、蔵開・上巻以前の仲忠はあくまでも、芸の人間、俊陰一族の秘琴の継承者なのであり、俊陰巻での弾琴や神泉苑での競演について言えば、これらを政治性の出発点と捉えるに留めるのであればともかく、柳氏が「時をえた為政者」の弾琴という段階にまで引き上げている点は、肯んじがたいのである。

また、氏は、仲忠が秘琴伝授完了後の秘琴披露を容易に引き受けている（楼の上・下巻・八九九頁）ことについて、「この秘琴披露に対する仲忠の「いと易きこと」の表現は、俊陰一族の秘琴披露を禁止する遺言が、仲忠の政治性によって崩されたことを示す表現であり、今まで、秘琴披露を躊躇していた仲忠の姿も積極的に秘琴披露を主催する姿へと変貌する」と論じるのであるが、これをもって「時をえた為政者」による「君子左琴」の体現とすることも、やはり憚られる。なぜなら、この時の仲忠は既に芸の人間として君臨してはおらず、まさに氏が指摘している通り、秘琴披露を主催する人間となっているからである。

仲忠は、最後まで琴の継承者として存在し続けたわけではない。彼はいぬ宮誕生の瞬間から、琴との距離を置きつつあったと考えられる[4]。仲忠の弾琴場面（俊陰巻・四一頁、俊陰巻・五六頁、俊陰巻・六〇頁、春日詣巻・一四五頁、吹上・下巻・二九〇頁、沖つ白波巻・四四八頁、蔵開・上巻・四七五頁、楼の上・下巻・八八七頁、楼の上・下巻・九〇五頁）を見ていくと、いぬ宮の誕生を境に、人前での弾琴が皆無になっていることが確認できる。また、琴以外の楽器についてもやはり、蔵開・上巻以降には演奏場面が格段に減少しているのである。

結局仲忠は、いぬ宮への秘琴伝授も、自ら行うことなく俊陰の娘に託した。そして彼自身はそれを演出する側に回ったのであるが、この動きは世間の噂や評価を意識した、政治的な要素を強く有したものであると言えよう。本来、秘琴伝授はあくまでも家の中の出来事であり、世間に披露する性質のものではない。それを敢えて行った仲忠の行動は、それまでの俊陰一族の論理から決定的に外れているのであるが、この不可解とも言える行動は、いぬ宮の春宮入内を意識した上で、この機会に世間の注目を俊陰一族に集めておこうとする、彼の目論見の一環でもあろう。

つまり、仲忠の行動はあくまでも、「琴を利用して政治性を高める」というものに他ならないのであり、それは「君子左琴」本来の「常に琴を携えて自ら奏でる」という行動と、もはや同義ではあるまい。「君子左琴」の思想が有する二面性のうち、「時をえず隠居の君子」となった者の琴を俊蔭に読み取るのは可としても、もう一方、「時をえた為政者」としての琴を、これらの場面から導き出される仲忠像に背負わせるのは適当でないと思われるのである。

第三節　「君子左琴」のずらし

さて、仲忠以上に政治色を濃く有する人物と言えば正頼が挙げられるが、彼の人柄は、藤原の君巻冒頭で次のように記されている。

昔、藤原の君と聞こゆる、一世の源氏おはしましけり。童より、名高くて、顔かたち・心魂・身の才、人にすぐれ、学問に心入れて、遊びの道にも入り立ち給へる時に、……

（藤原の君巻・六七頁）

ここからは、正頼が容貌や人柄、学問の面で優れているのみならず、芸の道にも通じていたことが窺われる。だが実際にはこの記述に反し、正頼と音楽との関わりや、その技量が詳細に語られることは、終ぞない。彼は一度限り、単独で琴を奏でているが（祭の使巻・二三二頁）、これは藤英の詩に合わせたものであった。あくまでも伴奏に過ぎないこの琴は、俊蔭一族のそれには程遠かろう。

正頼と琴との繋がりはむしろ、なかなか耳にすることのできない仲忠の琴を正頼が所望し、人々の関心をその琴へと向けるという点にこそ認められる。

左大将、「正頼が、『らうたし』と思ふ女の童侍り。今宵の御禄には、それを奉らむ」とのたまへば、からうして、万歳楽、声ほのかに掻き鳴らして弾く時に、……仲忠、例の曲の手をば弾かで、思ひの物を弾く時に、「かくては、御禄もいかがはせむ。なほ、少し細かに遊ばせ」と、切にのたまへば、調べ変へて弾く。面白きこと限りなし。いまだ、仲忠、かやうに弾く時なし。御前にて弾きしよりもいみじう、この声もたうへきて習ひ来たれば、なつかしくやはらかなるものの、いとめづらかに面白し。よろづの人、興じ愛で給ふ。ただ少し掻き出でたる、おとどの内響き満ちていみじきを、遺言の曲の三つを、声の限り掻き立てて、弾き給ふに、いとど、ありとある人愛で惑ひて、左大将のおとど、ましてあはれがり愛で給ひて、御袍一襲を脱ぎて、……

（俊蔭巻・六〇頁）

正頼は宴の折に、仲忠に弾琴を命じる。仲忠はそれを一旦拒否するが、結局はあて宮との結婚を匂わされたことにより弾琴し、その演奏は人々の感動を誘っている。そもそも俊蔭一族の秘琴は、あくまでも秘された琴であった。したがって、その秘すという特徴が守られる限り、琴は人々に認められることがないのである。人前での弾琴は、俊蔭一族の琴の在り方を揺さぶるものであったが、正頼が仲忠に弾琴を命じたことによって、その琴の素晴らしさが人々に認識されたという事実も、そこにはある。正頼と琴との関係は、人々の注目を仲忠の琴へと集め、その琴の価値を皆に認識させるための媒体として機能するという点にこそあったと言えよう。

なお、琴以外の楽器に目を向けた場合にも、正頼が楽器を手にする場面は決して多くはない。しかもその大半は、俊蔭一族のような独奏ではなく、他者との合奏であった。

行正琵琶、大将大和琴、皆調べ合はせて、ある限りの上達部、声を出だして、遊び興じ給ふ。……左、右の大将、御琴ども合はせて、仲頼・行正、笛吹き、ある限りの人、拍子合はせて遊び給ふ。面白きこと限りなし。（俊蔭巻・六〇〜六一頁）

仲忠笙の笛、行正ただの笛、仲頼篳篥、あるじのおとど大和琴、右大将琵琶、兵部卿の親王箏の琴、同じ声に調べて、いとになく遊び給ふ。（嵯峨の院巻・一八二頁）

おとど、「切に、興あることかな」とて、御佩刀の緒したたかに結び垂れ、御衣の尻走り引きて、笙の御笛取りて、右近の右の馬寮引きて、限りなく遊びて出で給ふ。（祭の使巻・二〇八頁）

一日、御物語し、御琴遊ばし、方々の男君たち、おとども、皆おはしまして、御遊びありて、方々より、興ある物ども、けうらに調じて参り給ふ。（菊の宴巻・三〇五頁）

かくて、おとどの、御笛・御琴ども遊ばせば、……おとど、「後生ひの恐ろしかりしかば。耳はすばりにしを、今宵は、『鼬の間』とこそ聞き給へけるに、物一つ遊ばせ、仕うまつりて、試みむ」とのたまひて、笙の笛を奉り給ふ。おとどは、皮笛を遊ばす。（国譲・中巻・六九四頁）

これらの描写からは、合奏が全体としてどのようなものであったかが窺えるのみであり、正頼個人の技量については知るよしもない。正頼の演奏はあくまでも、他者と共に場を盛り上げるという役目を担ったものに過ぎないと言えよう。彼は、「遊びの道にも入り立ち給へる」と語られているにもかかわらず、実際にはその能力を発揮する場を持たない、あくまでも政治面でのみ活躍する人物であると考えられる。

ただし正頼家では、音楽全般との繋がりが薄い正頼に代わるかのようにして、九女あて宮が琴の名手とされている。彼女は琴をたびたび演奏しており（藤原の君巻・一〇六頁、春日詣巻・一四四頁、嵯峨の院巻・一八三頁、祭の使巻・二一六頁、吹上・上巻・二七三頁、国譲・上巻・六六三頁）、その腕前は、

「……さて言ふやうは、『そこの御もとにあらましかば、この手は、いとよく習はし奉りてまし。この世には、そこにのみなむ、この族の手弾き給ふべき人はものし給ふ。……』。（国譲・上巻・六六〇頁）

など、奏法が俊蔭一族と似通っていることが、まさに俊蔭一族の秘琴の継承者たる仲忠によって語られるほどであった。しかしながらそのあて宮も、入内後は琴の名手としての側面を失っていく。皇子の母という要素が強調され、政争との関わりが濃くなってくると同時に、彼女は楽器を手にしなくなるのであった。立坊争いが激化する前に一度、彼女は女一の宮らとの合奏において琴を演奏しているが（国譲・上巻・六六三頁）、その他は、過去の演奏を回想する場面が所々に存在するばかりである。彼女は、入内という政治的要素と引き替えに、音楽から遠ざかっていった人物と言えよう。

したがって仲忠同様、正頼家においても、政治と音楽は並び立たない。「時をえた為政者」正頼は、琴のみならず楽器全般においてそ

の技量を語られることがなく、入内前には琴の名手とされていたあて宮でさえ、政治的局面に対すると琴から遠ざかっている。彼らが「時をえた為政者」の琴を体現する人物であるとは、到底言い難いのである。

加えて、政治の体現者として無視できないのが、嵯峨の院・朱雀帝・春宮といった、皇位についた人物であるが、彼らもやはり、自身が楽器を奏でることには重きが置かれておらず、音楽全般との縁が希薄であったと言わざるを得ない[5]。ただ、その代わり皇室は、俊蔭一族の秘琴を理解し、その繁栄を支えるという役割を担っている。俊蔭一族の秘琴は、嵯峨の院や朱雀帝から曲解をほどこされることによってその価値を高めており、また、弾琴を通して俊蔭の娘や仲忠が官位を得る際にも、帝の存在は必要不可欠であった。そもそも皇室は、俊蔭一族に琴がもたらされた背景にも存在している。朝廷が俊蔭を遣唐使に任じていなければ、俊蔭一族という琴の一族が誕生することはなかったのであり、その点も考え併せると、俊蔭一族が他の追随を許さない確固たる地位を築いてきたことの裏には、常に皇室の存在があったと言える。

これまで見てきた政治性と演奏場面との関係からは、『うつほ物語』において、政治と音楽に明確な棲み分けが存在していることが指摘できよう。『うつほ物語』を支える柱ともいうべき二つの要素が、琴と政治であることについては、もはや異論のないところかと思うが、にもかかわらず、この物語における「君子左琴」の思想は、「時をえず隠居の君子」となった者の琴が俊蔭によって体現される一方で、「時をえた為政者」の琴は、何者によっても体現されていないのである。

もっとも、一見音楽と無関係に見える為政者も、琴や演奏者を価値付ける人間としては機能している。芸から政治へと活躍の場を変えていった仲忠は、その変貌と同時に楽器を手放し、俊蔭の娘やいぬ宮の琴を演出する側にまわる。物語全体を通じて政治要素を色濃く有する正頼は、仲忠の琴を世に知らしめるという働きを持ち、皇室の人間もまた、俊蔭一族の秘琴を価値付けるという役割を担う。『うつほ物語』の「君子左琴」の一面、すなわち「時をえた為政者」の琴は、君子本人によって体現されるのではなく、他者の琴を君子が価値付け、演出するという形へとずらされていると言えよう。

第四節　男たちの対立回避

仲忠は蔵開・上巻以降、為政者としての一面をもって、正頼に対抗し得る政治家へと変化していった。かつては、仲忠の琴の才能を認める正頼が彼を婿として欲するなど、至って良好であった両者の関係だが、この関係はあくまでも仲忠が芸の人間であるということを前提に成り立っていたのであって、政治性を帯びた彼が正頼と対立しないということには、必ずしもならないのではないか。仲忠が正頼の孫娘を妻にしているとは言え、両者はそれぞれ異なった氏族の人間であるからして、その関係は一筋縄ではいかないはずなのである。

しかしながら、彼らの関係が決定的に悪化することは、終ぞない。源氏対藤氏の対立構図を背負った立坊争いにおいてさえ、両者の間

に緊張は走らないのである。それは主に、仲忠が異母妹梨壺の皇子を推す態度を示さなかったことに起因している。兼雅の姉である后の宮は、藤氏繁栄のため梨壺腹皇子を立坊させんと奔走するが、その動きを耳にした仲忠の反応は、非常に素っ気ないものであった。

「いかなるべきことにか侍らむ。仲忠は、いかでか取り申さむ。殿の御ためにやごとなきことなり。それによりて、侍らむ所に思ひ疎まれむも、苦しうなむ。ただ、后の宮ののたまはむ、奉り給へ。非常と見ることも侍らば、いとよきことなり」

（国譲・中巻・七〇八頁）

梨壺腹皇子が立坊するのであれば、それはそれで良いことであろうと言い、后の宮の動きを敢えて阻止することはないが、さりとて異母妹、ひいては藤氏のために自ら奔走することもないのである。それは彼自身が口にしているように、妻女一の宮が正頼の孫娘であることによっていた。大々的に梨壺側につくことは、すなわち正頼との対立を引き起こすことになる。それは女一の宮との関係上避けたいというのである。仲忠はあくまでも、政治的算段よりも家庭平和を上位に置くのであった。

ただ、それ以上に彼は、あて宮の勢力を目の当たりにし、彼女と対立するリスクを感じ取ったものと思われる。だからこそ、仲忠はあて宮に反目する意志のないことを、女一の宮を通して明確にしようとしている。

大将、宮に聞こえ給ふ、「世に、人の言ふなることは、ここにも知りて侍らむやうに聞き給へらむがいとほしきこと。おのづから御覧ずらむ。御即位に参りて侍りしままに、院の、かく旅におはしますだに参らず、三条にもまからで侍るは、『知り侍らぬよしを、一所に御覧じてば、罪には当て給はじ』とてなむ。……」

（国譲・下巻・七六八頁）

源氏と藤氏の板挟みとなった仲忠にとっては、この際、どちらにも加担せず無関心を決め込むことこそが、最良の道であったと言える。かつての想い人との対立を避けたいという心情があったことも否めないが、それ以上に、目先の栄光にとらわれずメリットとデメリットを天秤に掛けた、極めて冷静な計算も、そこには働いていたと思われる。

だが、彼の強かさは立坊争い終結後に絶頂を迎える。

「先つ頃、世の中にあやしきことを申しけるを、卑下せる所に、『いかに思う給ひたらむ』と、聞こし召しけむことをなむ、ここにもかしこにも、限りなく思う給へ嘆きて、誰も誰もまかり歩きもせで侍りつる。ある所より、かの三条に、とかくのたまはすることなむありける。『さる心も思ひ知れ』とて、かの宮消息にて侍りし、『こと定まりて御覧ぜさせむ』とてなむ、まだ失はで侍る」とて、この君して、宮の御文を奉り給ひて、聞こえ給ふ、「かくも聞こゆまじけれど、昔の心ざし失はず、今、行く先、頼み聞こゆることも、なほ侍れば。『うたてある心も持たる者ぞ』ともぞ思し出づる」と聞こえ給へば、見給ひて、大宮なども、「いと恐ろしくもありけるかな」と。

（国譲・下巻・七九一〜七九二頁）

自分が、藤氏でありながら源氏にとっていかに安全な人間であるか。その点を、仲忠は自らの伯母を売ることによって証明している。

同族の謀をも源氏側に暴露することで、彼はいわばあて宮や源氏に対する、忠誠心にも似たものを示すのであった。

他方、あて宮の言動にも、この政争を通して仲忠を敵視した様子は見受けられない。立坊争いが本格化する直前、あて宮は、自らの第一皇子の教育を仲忠に依頼しているが（国譲・上巻・六四一頁）、皇子の教育を任せるにふさわしい人物は、必ずしも仲忠のみではなかった。たとえば、涼に皇子の教育を託して源氏の結束を固めることも、あて宮には可能だったはずである。にもかかわらず、彼女は敢えて藤氏の仲忠に教育を任せたいという意志を示した。この動きは、一種の藤氏懐柔とも捉えられようが、ともかくあて宮と仲忠が、たとえ外見上であろうとも協力体制を築くことによって、源氏と藤氏の対立は避けられているのである。

また、この政争においては仲忠のみならず兼雅も、非常に奇妙な態度を見せている。

「『後生ひ』と言ふことのあれば。などて、わが孫にこそあれ、『必ず、異筋』とも思ひ尽くらむ。院の后の宮は、そこの筋にはものし給はずや。内裏のは、御妹にはあらずや。など、わが子、そこの御子ならむからに、この筋の絶ゆべき」とのたまへば、おとど、「うたてあること。かけても、え言ふまじきことなり。昔なりせば、何の疑ひは」などのたまふ。

（国譲・上巻・六七〇～六七一頁）

「……仲忠の朝臣、かの家に侍らねど、あるが中の君にして、もてかしづき侍る人につきて侍り。子に、限りなく愛しうする女子侍り。またもあるやう侍なり。かくのごと、手を組みたるやうに行き交じり、この中に、いささか疎かならず、命を限りて侍るに、『かかることをなむあひ定むる』と聞き侍りなば、この娘どもをも取り放ちて、帝にも、かれこれにも、またあひ見せ奉るべきにも侍らず。……」

（国譲・下巻・七四七頁）

おとど、「大将を、な見そ」とのたまひつるに驚きて、「坊をば、据ゑずは据ゑず。大将を、疎かには、いかが思はむ。かくのたまふが、恐ろしく、かしこきこと」

（国譲・下巻・七六六頁）

梨壺腹皇子の立坊を期待する女三の宮の言葉を、兼雅は強く否定する。彼にとって、あて宮腹皇子の立坊は既に決定したに等しいことであり、今さら梨壺腹皇子に期待をかけるのはとんでもないことだと言うのである。それに加え、女一の宮を介した仲忠と正頼の縁故も、兼雅を政争から遠ざける要因の一つとなっていた。自身の孫を次期春宮に推そうとする姿勢はまったく見えず、むしろ「坊をば、据ゑずは据ゑず」とまで言い放つ態度は、投げやりでさえある。本来、正頼対仲忠、またはあて宮対仲忠の場合と同様に、正頼と兼雅の対立は源氏対藤氏という構図を明確にするものであるが、仲忠が無関心を決め込むことで対立を避けたのと同じように、兼雅もその煮え切らない態度によって、対立を回避するのであった。加えて、この兼雅の消極的な姿勢は、兄忠雅にも通じていた。正頼の六の君を妻としている忠雅は、妻との関係を良好に保つため、后の宮の望むような行動は取らないのである。

だが、彼らのこの態度は、梨壺腹皇子立坊に躍起になっている后の宮を激怒させる。

「さぞかし。女なるおのらだにこそ、筋の絶えむことは思へ。ぬ

したちは、何のなり給ひつればか、『女の子、愛し』とて、かかる大いなることの妨げをばなさるる。世の中に、女はなきか。それにまさりたらむ人をも、おのれ奉らむ。……」

（国譲・下巻・七四八頁）

史実上の藤氏の政治性を考えると、兼雅らの言動には、たしかに違和感を禁じ得ない。ただその反面、彼らはこの后の宮の存在によって、立坊争いの前線に立つことが避けられていると言えよう。内藤英子氏が「后の宮の主張は「筋」が通っており、論理的で説得力があり、后の宮は本来なら一族の長である忠雅が行うべき役割を果たし、彼女自身が藤原氏一族の最高指導者であるかのようである」と指摘するように(6)、后の宮は、煮え切らない態度を貫く男たちに代わり、藤氏を代表して動いているのである。

そして正頼もまた、あて宮の存在ゆえに、自らあて宮腹皇子立坊のため奔走することが避けられている。あて宮は春宮からの文に満足な返事をせず、時に無視を決め込むという形で、自身の第一皇子を立坊させるよう、春宮に圧力を掛けるようになるが（国譲・中巻・七二七頁）、その一方で正頼は、

「かのことは」。おとど、「空言にあらじ。内裏の后、いとおぞく、心かしこくものし給ふ。やむごとなき人々、御氏なり。さすれば、必ず、さ思すならむ。后・大殿、大臣・公卿たち、心を一つに、例を引きて、『これを』と申さむには、何の疑ひかあらむ。我は、馬に交じりたらむ牛のやうにて、何ごとをかは。……」

（国譲・中巻・七〇四頁）

と、ひたすらに弱気な態度を見せている。あて宮の強かさとは対照的に、正頼はこの重要な局面で、為政者としての動きをまったく見せないのである。藤氏においては、消極的な男たちに代わり后の宮が奔走していたが、それと同じ現象が、源氏ではあて宮と正頼によって繰り広げられている。結果的に、正頼と兼雅、または正頼と仲忠の決定的な関係悪化は、あて宮と后の宮という女たちの存在ゆえに、回避されていると言えよう。

后の宮と正頼家の女は、これ以前にも政争を繰り広げている。かつて后の宮は、正頼家の長女仁寿殿女御と皇子の皇位継承を争った。それを二重写しにする形で、あて宮腹皇子と梨壺腹皇子の立坊問題は仕組まれているのであり、この争いにおいて、正頼や兼雅、そして仲忠が積極的な態度を示すことは終ぞない。皇子の母である梨壺までもが実質的に蚊帳の外に放り出されているのも、まさにこの点に起因すると思われる。この構図は、后たちの裏に父の存在が見え隠れする摂関体制とは一見矛盾するものであるが、源氏対藤氏という構図が女たちによって体現されることで、男たちの対立は巧妙にずらされているのである。

第五節　次代への足掛かり

『うつほ物語』の男たちはこのようにして、立坊争いから一歩引いた立場を取っているのであるが、いぬ宮誕生以降ようやく「時をえた為政者」としての力を付けつつある仲忠は、今後、どのような政治的立場に身を置いていくのか。先述したように、この物語において音楽と政治が両立することはないのであり、仲忠はもはや、芸の

人間ではない。にもかかわらず、立坊争いに際して彼は、藤氏の人間として梨壺腹皇子を擁立することを頑なに拒んだ。実際、立坊争いが決着を見た直後の、

大将、聞き給ひて、「このことにより、頭を、えさし出でで、朱雀院、ひがひがしきやうに思されき。三条に、はた、えまうでで、からき目を見つるかな」とて、内裏へ急ぎ参り給ひぬ。

（国譲・下巻・七八四頁）

という仲忠の言葉は、単なるポーズではなく、彼の偽らざる本音ではなかったか。仲忠は実は、梨壺腹皇子の立坊による藤氏の権力増幅には拘っていない。既に触れたように、それはあて宮の、ひいては源氏の勢力を目の当たりにした時分から仲忠が貫いてきたスタンスであり、彼は、その勢力に敢えて対抗する気は毛頭ないのである。そのため、興味すら示さなかった立坊争いに自分が加担しているかのように噂されることは、事実、仲忠にとっては迷惑以外の何物でもなかったのであろう。この面倒な政争が終結した後、彼が足取り軽く内裏へ向かったのも道理である。

この態度は、為政者としての動きから完全に逆行した、矛盾を孕むものと言うより他ない。しかも、立坊争いが佳境を迎えた時期、藤氏の結託ぶりを問い詰める女一の宮を巧みにかわし、仲忠は水尾へと赴いている。

宮、「皆集はれてこそ定められけれ。知らず顔にも」。大将、「すべて、このこと、なのたまひそ。さらに知り侍らず。さるは、去年より、『水尾に、山籠り訪ひにまからむ』と言ひ契りて侍るを、花盛りにも、とかく障りてものせずなりにしを、この頃、『紅葉の散らぬ前に』とてまかり出で立つなるを、一、二日侍らざらむほどの後ろめたければなむ。……」

（国譲・下巻・七六八頁）

この切迫した時期をことさらに選んで水尾を訪問するという不自然さは、立坊争いの煩わしさから逃れようとする仲忠のねらいを、そのまま物語るものであろう。

だが、このとき仲忠が見据えていたのは、梨壺腹皇子の存在にぶら下がった目先の栄達ではなく、その先、あて宮腹皇子であれ梨壺腹皇子であれ、立坊した次期春宮のもとに娘いぬ宮を入内させること、その一点ではなかったか。そもそも、立坊争いを避けるかのようにして行われたこの水尾訪問は、単なる政局からの逃避ではなく、むしろ、極めて政治色の強い行動として位置付けられるべきである。(7) 水尾に籠もる仲頼は、娘と二人の息子たちの処遇について、仲忠に相談を持ちかける。

山籠り、「さだに御覧じなさば、いとうれしく、『仏の御徳』となむ。この侍る童部も、母とて侍る、身一つだに侍りがたげにもにこそは』と思ひ給へてなむ。女子をさへものして侍るを、『童部は、いかで、宮仕へも仕うまつらせむ』と思ひ給ふれど、親は頼りなく侍れば、『いかでかは』とてなむ」。大将、「『いづこに、いかにせむ』とか思ほす。せむやうをのたまへ。かの叔母君に預け奉りて、一向にこのことを後見奉らむ」。「さは、いとうれしきことなむ。昔だに、いと御前に候ひがたかりし上には、え候はじ。『今居給はむ春宮に奉らむ』となむ」。

（国譲・下巻・七七六頁）

自らが世捨て人同然になっているにもかかわらず、仲頼は娘を入内させる望みを捨てていない。その姿は、周囲から勧められても娘袖君の入内を躊躇した実忠（国譲・下巻・七九三頁）とは対照的であり、仲頼は世俗的な摂関志向を捨てきれずにいる、いわば俗世への執着を残した人物であると言えよう。然るに、自分のような親では入内の後ろ盾として頼りにならないという判断のもと、彼は仲忠の意見を請う。すると願ってもないことに、仲忠は、仲頼の娘を仲頼の妹に預けた上で自分が面倒を見ようと申し出るのであった。

一方では仲忠自身もまた、娘いぬ宮の次期春宮入内を視野に入れていると考えられる。その状況で、仲頼の娘をも自らの娘同様の扱いで入内させることが可能になったという事態は、仲忠のもとから后を出す可能性が倍になったという点で、一見すると、仲忠にとっても悪い話ではないようである。だが、彼が仲頼の娘をそのように扱うことは、実際にはあり得ないと思われる。仲忠が藤氏の人間であるのに対し、仲頼は源氏であり、仲頼の娘はあくまでも、いぬ宮のライバル的存在に他ならないのである。春宮に差し出し得る娘が二人になったとは言え、仲忠が、他氏の娘を実の娘と同格に扱うとは、到底考えられない。

つまり仲忠は、仲頼の娘の将来を託されることにより、いぬ宮のライバルの芽を事前に摘み取ることに成功していると言えよう。仲頼は梨壺腹皇子立坊の噂を信じ、藤氏の権力掌握を予測した上でこの選択をしたと考えられるが、そのリスクに気付かずひたすら喜ぶ彼の姿は、いささか滑稽でもある。しかも、仲忠に託されたのは仲頼の娘だけではなく、息子たちも同様であった。男子であれば、后の座を争う女子の入内の場合とは異なり、多勢であればあるほど、養父たる仲忠にとって有益に働く。仲忠は、後に邪魔になるであろうライバルの芽を摘むと同時に、利用できる男子をも手中に収めているのである。

したがって、政争から逃げ出すかのようにして行われた水尾訪問は、図らずも、仲忠の政治力を高める場となっている。さらにこの後、楼の上・上巻に至ると仲忠は新たに、異母弟小君や、かつての乳母の孫という、自らの息子ではないながらもそれに類似した役割を果たす、いわば擬似的息子とも言うべき人物を手に入れることとなる[8]。

その一方で、典型的な為政者として存在感を放っていたはずの正頼については、陰の部分が見え隠れするようになっている。たしかに、あて宮の入内、相次ぐ皇子の誕生と、正頼は摂関的権力に着実に近づきつつある。だがそれと逆行するように、春宮との関係悪化（蔵開・下巻・五九二頁）、正頼邸の解体（国譲・上巻・六二三頁）など、正頼を取り巻く状況ははかばかしくない。結果的にあて宮腹皇子が立坊したことにより、正頼の政治的立場はより強固なものとなったはずであるが、ここに至っても正頼の栄華はさほど描かれないのである。正頼の存在意義は、あて宮求婚譚によって数々の男性を正頼邸に惹き付け、世間の噂を作り上げた、その一点にこそあったのであり、物語は、正頼に与えられた権力から目を背けるかのようにして、政治の視座を次代の仲忠へと動かしていくのであった[9]。

「時をえた為政者」でありながら、その権力から突き放された形で

描かれる正頼。次代への足掛かりを着実に築きつつある仲忠との明暗は、言うまでもない。正頼の息子たちの中に、将来を期待されるめぼしい人物がいないという点も、その現象に拍車を掛けていよう。源氏の勢力ゆえに、当面は大人しくしておくことを決め込んだ仲忠ではあったが、その裏で彼は、既に次代を睨んだ動きを活発化させているのであり、今後、藤氏の仲忠が源氏の正頼に代わり、「時をえた為政者」として君臨するようになることは、もはや疑いの余地のないところである。

第六節　おわりに

以上、『うつほ物語』における「君子左琴」の様相を押さえた上で、政治と関わる君子の動きを探ってきた。「君子左琴」の抱える二面性のうち、「時をえず隠居の君子」となった者の琴については俊蔭によって体現されているものの、「時をえた為政者」の琴を体現する人物は、作中には存在しない。この物語において、政治と音楽は両立し得ないのであり、「時をえた為政者」の琴には、自らが楽器を奏でるのではなく、他者の琴を価値付けるというずらしが潜んでいるのである。

そのため、俊蔭一族の秘琴の継承者として存在していた仲忠も、いぬ宮誕生後、為政者の側面を強めていくに従い、自身が芸の人間として君臨する場を失っていく。仲忠は為政者として生きる人物への変貌を遂げているのであり、その意味では、藤氏である彼と源氏である正頼の対立は、避けられないものであるように思われる。

だが実際には、立坊争いという家の問題を孕んだ政争においてさえ、両者の関係が悪化することはなかった。そればかりか、仲忠の父兼雅と正頼との関係もまた、仲忠の場合同様に悪くなってはいない。それは、源氏対藤氏という対立構図が彼ら男たちではなく、宮中の女たち、すなわちあて宮と后の宮によって作られたことに起因していた。無論これは、仲忠や兼雅があて宮の勢力を認め、対立を避けるという選択を下したことにもよっているが、女たちの対立が前面に押し出されることで、正頼や仲忠、そして兼雅といった、それぞれの家を代表する男たちが表立って対立することは、回避されるのであった。

しかし、あて宮の権力には一目置いている仲忠も、その裏では次代を担う人物としての力を強めつつある。目先の立坊争いには無関心を決め込んだ仲忠であったが、彼は水尾訪問で仲頼の子供たちを手中に収めることにより、いぬ宮のライバルの芽を摘み取り、さらには利用価値のある男子を得ることに成功しているのである。

仲忠は、目の前にある権力、つまり梨壺腹皇子の存在にぶら下がった栄達には興味を示さなかった。だがそれは、すなわち仲忠の政治的無関心を意味するものではなく、彼の関心が、目先ではなく次代へと向けられていたことを示すものである。この仲頼家の取り込みに加え、仲忠は後に、異母弟小君や、かつての乳母の孫という、擬似的息子をも手に入れることになる。その姿は、世間から為政者と認識されているにもかかわらず、あて宮の入内以来、実質的権力を失いつつある正頼とは対照的である。いぬ宮の春宮入内の下準備、そして有能な男子の確保。芸の人間から為政者への変貌を遂げた仲

忠は、源氏との関係をあくまでも友好な状態に保ったまま、次代への足掛かりを築いていくのであった。

注

（1）本文引用については、漢籍は『漢文叢書　古列女傳・女四書』（塚本哲三氏・有朋堂書店・一九二〇年六月）および『全釈漢文大系　礼記　上・中』（市原亨吉氏／今井清氏／鈴木隆一氏・集英社・一九八六年九月）、『うつほ物語』は『うつほ物語　全　改訂版』（室城秀之氏・おうふう・二〇〇一年一〇月）によった。本文に付した傍線は引用者による。なお、作中では三度の御世代わりがあるため、院、帝、春宮については呼称が変化するが、本稿では便宜上、嵯峨の院、朱雀帝、春宮とする。また、あて宮は入内後に藤壺の女御となるが、呼称はあて宮で統一した。

（2）「琴の家伝と俊蔭一門の造型」（『物語作家圏の研究――その位相及び教養よりみたる物語の形成――』武蔵野書院・一九六四年七月、初出『文芸と思想』二〇号・一九六〇年一二月）。

（3）「『宇津保物語』俊蔭一族の琴の両義性――俊蔭と仲忠の予言の視点を通して――」（『古代文学研究（第二次）』八号・一九九九年一〇月）。

（4）拙稿「『うつほ物語』の描写方法――人物造型と音楽描写の関連性をめぐって――」（『国語国文研究』一四一号・二〇一二年二月）参照。

（5）拙稿「『うつほ物語』俊蔭一族と皇室の距離――琴をめぐる思惑――」（『国語国文研究』一三八号・二〇一〇年七月）参照。

（6）「后の宮の造型――『うつほ物語』から『源氏物語』へ」（『古代文学研究（第二次）』一七号・二〇〇八年一〇月）。

（7）大井田晴彦氏も「「国譲」の主題と方法――仲忠を軸として――」（『うつほ物語の世界』風間書房・二〇〇二年、初出『国語と国文学』七五―三号・一九九八年三月）において、仲頼や忠こその一家を吸収していく仲忠について、

> 物語の後半部に至ると、他家を吸収して自家を伸長していく仲忠の姿が顕著となるが、正頼の政治の論理によって形成された閨閥とは似て非なるものであることには注意しておきたい。……正頼が恐れているのは、后の宮や兼雅などではない。何よりも、仲忠の人間的な魅力が人々の心を惹き付けていくのを危惧しているのである。

と述べており、首肯すべきと思うが、本稿ではそれに加え、人徳ゆえに仲忠の周りに人が集まるという平和の裏に、為政者仲忠が握っている仲頼の子どもたち、特に娘の運命の暗さも読み取りたい。

（8）拙稿「『うつほ物語』俊蔭一族と宰相の上親子の織りなす血縁の世界――〈縦の繋がり〉と〈横の繋がり〉の絡み合い――」（『古代中世文学論考』第二三集・新典社・二〇〇九年一〇月）参照。

（9）拙稿「『うつほ物語』源正頼家と皇室――主導権の逆転と正

頼の両義性――」（『国語と国文学』九〇―一号・二〇一三年一月）参照。

（とだ　ひとみ・北海道大学大学院専門研究員）